水江の浦島子を詠む一首　并せて短歌

一七四〇番

春の日の　霞める時に　墨吉の　岸に出で居て　釣舟の　とをらふ見れば　古の　ことそ思ほゆる　水江の　浦島子が　鰹釣り　鯛釣り誇り　七日まで　家にも来ずて　海界を　過ぎて漕ぎ行くに　海神の神の娘子に　たまさかに　い漕ぎ向かひ　相とぶらひ　言成りしかばかき結び　常世に至り　海神の　神の宮の　内のへの　妙なる殿に携はり　二人入り居て　老いもせず　死にもせずして　永き世に　ありけるものを　世の中の　愚か人の　我妹子に　告りて語らく　しましくは　家に帰りて　父母に　事も語らひ　明日のごと　我は来なむと　言ひければ　妹が言へらく　常世辺に　また帰り来て　今のごと逢はむとならば　このくしげ　開くなゆめと　そこらくに　堅めしことを　墨吉に　帰り来りて　家見れど　家も見かねて　里見れど　里も見かねて　怪しみと　そこに思はく　家ゆ出でて　三年の間に　垣もなく　家失せめやと　この箱を　開きて見てば　もとのごと　家はあらむと　玉くしげ　少し開くに　白雲の　箱より出でて　常世辺にたなびきぬれば　立ち走り　叫び袖振り　こいまろび　足ずりしつつたちまちに　心消失せぬ　若かりし　肌も皺みぬ　黒かりし　髪も白けぬ　ゆなゆなは　息さへ絶えて　後遂に　命死にける　水江の浦島子が　家所見ゆ

反歌

一七四一番

常世辺に　住むべきものを　剣大刀　己が心から　おそやこの君